KAPPA NOVELS

SF情報小説

さらば人間〈新・創命記〉

田中光二

お願い——

この本をお読みにこの本をお読み感想をもたれたでし想をもたれたでの感想」を左記あて感想」を左記あけましたら、ありがましたら、あり

なお、このほかになお、このほかでは、どんな本を読は、どんな本をか。どの本にも、一。どの本にも、いようにつとめておようにつとめてお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢なども書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
（郵便番号112）
光文社　出版局

SF情報小説　さらば人間

昭和53年1月25日　初版1刷発行
昭和53年2月20日　　3刷発行

著者　田中光二（たなか こうじ）
横浜市戸塚区小菅ケ谷 215-9

発行者　小保方宇三郎

印刷者　萩原崇男
東京都文京区後楽2-21-12
萩原印刷

発行所　東京都文京区音羽2　振替 東京6-115347
株式会社 光文社
電話 東京(942) 2241(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　（明泉堂製本）
表紙の模様・意匠登録 116613
© Kōzi Tanaka 1978

(分)0-2-93(製)02335(出)2271 (0)
Printed in Japan

SF情報小説

さらば人間〈新・創命記〉

田中光二

カッパ・ノベルス

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

目次

第一話　創性記　5
第二話　鬼子父神　33
第三話　マリオネット特務員　61
第四話　過去を買う女　89
第五話　闇よりの侵略者　119
第六話　凍った明日　147
第七話　神への道　177

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

本文イラストレーション　太田泉

第一話

創性記

1

幾度目かの緊張放出がやって来て、私は彼の上で反り返った。

正確には放出ではないかもしれない。そもそも快楽の絶頂を表現する語彙は、人間にはまだとぼしいのだ。鋭い収縮と拡散、爆発と上昇、そしてめくるめく墜落……それらすべての感覚を内包し、なおかつあまりあるものが、私のオルガズムにはあった。

それは快楽の高原を果てもなくさまよった末にやって来たものである。ふつうのセックスを短距離レースにたとえるなら、それはマラソンともいうべき長丁場だった。マリファナと快楽剤の組み合わせが、それをもたらしたのだった。

セックスで肝要なものは量よりも質で、オルガズムを繰り返してきわめようと欲するよりも、ただ一度のそれをとことん掘り下げた方がより楽しい。

そこで私たちは合成大麻をやったのである。それは主観的時間を大いに引き延ばす。一回のオルガズムを、おそろしいほど丹念に味わうことができるのだった。

もちろん、私が行き着くと同時に、彼も到達したのだ。私は彼の裸の胸に顔を伏せ、彼の心臓が、ふしぎな余韻を持った鐘の音を、ゆっくりと打つのを聞いた。数重の電子処理をほどこされた、ミュージック・コンクレート音のようだった。

呼吸がしずまったあと、私はぼんやりと頭を起こした。体内に熱く充たされていたものが、早くも退いて行くのが感じられる。私の体内には、文字どおり飽くことを知らない欲望のけものが、今棲みついているのだ。――「愛の機械」――私たちは冗談半分に、そのような状態の自分たちを呼びならわしている。まさに私は今、そのメカニズムの活動の頂点にあった。

部屋の中は洞穴のように暗い。テーブルの上の一本のろうそくだけが唯一の灯りなのだ。その淡い照り返しを受けて、ソファの上や床の上でからみ合い、のた打ち回っているいくつもの裸体が見える。

誰かが持ち込んだ、昔なつかしいピンク・フロイドの電子サウンドが、室内を暗く甘い蜜のように充たしている。没薬に似たグラスの匂いが、床の上を低く漂っている。

もちろん私のトリップはまだ続いていたので、それら

は異常に鮮明に感じられた。ピンク・フロイドの暗欝で夢幻的なサウンドは私の耳をさまざまにうねる色彩で充たした。からみ合った肉体が上げる呻きは、よろこびに充ちたメロディアスな音楽となって、私の全細胞をふるわせるのだった。

私は体を起こそうとした。だが、彼は私を放そうとはしなかった。私の肩をつかみふたたび腰を突き上げ始めた。彼の武器はすでに硬度を取り戻し、私を楔のように、つなぎ止めているのだった。

ゆるやかなリズムに私は身をゆだね始めた。ふいに彼のものではない腕が私の腰を抱くのを感じた。熱い湿った体が背後にぴったりと貼り付いた。脈打つものがアヌスを掻き分けて入り込んで来た。

灼熱した、痛みとも歓喜ともつかぬ感覚が私をつらぬいた。もっともこの二つは、その頂きにおいてしばしば合致するものである。私は頭をのけぞらせ、けものじみた呻きを上げた。……

ぐったりと、リクライニングされたシートに体を沈めた。彼が煙草をさし出してよこしたが——ふつうの煙草だ——黙ってかぶりを振った。

文字どおり泥のように疲れていた。出がけにシャワーを浴びて来たので、少なくとも体だけはさっぱりしている。だが、幻覚煙草の効き目が切れた反動も手伝って、伸び切ったゴムのように弛緩した状態になっていた。

「大丈夫か？　未来」

エンジンのスターター・ボタンを押しながら、彼——矢筈紀彦がいった。車は彼のもので、タービンエンジンを積んだ最新式のスポーツ・クーペである。もちろん最近の排気ガス規制をクリアしている。

「何でもないわ」

うっそりと私は呟いた。

「ちょっと疲れただけよ」

ボア付きのニュースウェードのコートの襟にさらに顔を埋め、たった今出て来たばかりのマンションの住まいを車の窓ごしに眺めながら、私は心のうちで呟いた……そうよ、ちょっと疲れただけよ。いつもの気楽なパーティに、お馴染みの快楽。それ以上のものでも、以下でもないわ。

夜はようやく明けそめたばかりだった。ここ世田谷・瀬田の高層マンション街は、まだひっそりと寝しずまっている。私たちがちょっとしたパーティを今まで続けて

いた三階の部屋の窓も閉じられたままだ。まだ仲間のうちの大半は、フロアやソファで眠りこけているのだろう。

ありふれたパーティにちがいないとはいえ、誰でもが催せるというものでもなかったろう。マリファナやLSD、その他習慣性のない合成幻覚剤のたぐいは解禁されているが、いわゆる快楽剤（P・P）――間脳の視床下部を刺激する催淫ホルモン剤――は、いまだに市販を禁じられているからだ。

製造元のアメリカでは、とうに解禁されており、危険な副作用のないこともほぼ確認されているが、日本の厚生省は、新薬の導入に関し、いまだに超保守的な姿勢を保ち続けていたからである。

私たち医科大学生のように、研究用のサンプルをこっそりと持ち出せる連中だけが、それを楽しめる機会にありつけるのだった。

もっともかつてのマリファナのように、ブラックマーケットができあがり、かなりな量が社会に流れていることは公然の秘密だったが。

彼はゆっくりと車をスタートさせた。囁くようなエンジン音を立てて、車はなめらかに加速して行く。マンション街を抜け、電気タクシーがちらほらと走っている環状線に乗り入れ、四車線の左端を巡航し始めた。――彼は何もいわないが、横浜・日吉の私の家まで、もちろん送ってくれるつもりなのだろう。

「紀彦……あなたこそどうなの？　何だか気分が悪そうだけど」

事実、彼は冴えない顔をしていた。徹夜のパーティのあと、はつらつとした顔をしているわけもないが、それにしても精気がなかった。悩ましげな表情とさえいえた。

あのていどのセックスが応えているはずもない。この二年間の付き合いを通して、私にはそう断言できる。彼はスポーツ万能の肉体を持ち、男と女のスポーツに関しても、抜群の耐久力をそなえていたからである。

矢筈紀彦は、私が通う大学院の研究室のクラスメートである。

セミナーの席で初めて顔を合わせた瞬間から、私たちの間にはテレパシーに似て通い合うものがあった。

一目惚れなどというロマンティックなものではない。一種の仲間意識というべきものだった。私たちはたがいに、快楽の嗜好において、同類であるという匂いを嗅いだのである。

――果たして、たちまちのうちに私たちはすぐれたセ

ックス・パートナー同士となった。
私たちは、肉体的快楽を追求する時間のほかにも、さまざまなものを分け合った。彼は秀才であり――胎児酸素加法という、一種の外科手術を受けて生まれた天才児なのだった――研究仲間としても申し分なく、ベッド以外の場所で時をすごしても、楽しく気のおけない相手だった。
胎児酸素加法というのは減圧法ともいい、南アフリカ共和国で開発された技術だ。妊娠中の女性の腹部と骨盤をプラスチックの容器でかこい、その中の気圧を大気の五分の一まで減圧する。その結果、母親から来た酸素がよく循環するようになり、胎児の脳の発育を促すというものである。
遺伝子工学の研究者だった紀彦の両親は、アメリカの大学に招かれてともに研究生活を送っていたが、やがて母親が彼を孕み、この〝天才児育成法〟をすすんで受けたのだった。
いずれにせよ彼は、すぐれた頭脳を持つとともに、きわめて男らしい男性としても生まれて来た。私としては文句ないパートナーだったのである。
「幻覚煙草とアルコールのチャンポンを、やりすぎたのかもしれん……」
紀彦は、ステアリングから右手を離し、額をこすった。しばらくその動作を続けていたあと、思い切ったようにいった。
「いや、正直なところをいおう。じつは最近、パーティをあまり楽しめないんだ。乱痴気さわぎのあとは、いつもむなしくなって来る……」
「くすりの効き目が切れた時は、私だってそうなるわ」
私は、断ち切るようにいった。
「単なる生理的な反動よ」
「それが、そうとも思えないんだ。――未来、俺たちはいったい何なんだ？　肉体と心が、他人に向かって完全に開放されているのなら、どこに二人が一緒にいる意味がある？」
「おねがいだから、愛なんてことばは持ち出さないで」
私は冷ややかにいった。
「それは問題を混乱させるだけだわ」
「俺にもそんなつもりはない。だが、君を所有したいと……独占したいと願ってはいけないのか？　それは男としての当然の衝動じゃないのか？」
「おたがいに所有し合い、そして縛り合うことになる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

それが、今までの男と女が繰り返して来た愚行だわ。
私はその過ちを繰り返したくない。私たちは最初から、その点で合意に達していたはずよ。そうじゃなかったかしら？」
「たしかにそうだった……」
呻くように紀彦はいった。
「だが人間は変わる……この俺もどうやら変わりつつあるらしい」
「帰って、ぐっすり眠るのよ」
私はいたわるようにいった。
「そうすれば、もとの自分を取り戻せるわ」
紀彦は答えなかった。——アクセルを踏み込まれた車は、弾かれたようにスピードを上げ始めていた。

2

ガレージの扉が閉まる音に、私は読みふけっていたドイツ医学雑誌の学術論文から目を上げた。
高等哺乳類のクローン生殖（一つの細胞核からコピーした複数の個体）に関する論文で、明日のセミナーにそなえて頭に入れておかねばならぬ参考文献だった。
机の上のデジタル時計に目をやる。深夜の二時をすぎている。アンフェタミン系の思考促進剤を飲んでいるので、私の意識は冴え切っている。効率的な頭脳労働のためにはなくてはならぬ薬だった。通常に数倍する集中力が得られるのだ。
だが、私は雑誌をそのままにして、机から立ち上がった。部屋を出て、階段を居間へと降りて行った。
キッチンのテーブルの上には、通いの家政婦が用意していった軽食が載っているはずだ。だが、一家の主人には出迎えを受ける権利がある。父と娘二人きりの家であればなおのことだ。——そんな理屈を抜きにしても、父をあたたかく迎えることは私の欠かせぬ習慣になっているのだった。
父は、居間に入って来るなり、コートとブリーフケースを、ソファの上に投げるように置いた。自分もソファの端にどさりと腰を下ろした。みるからに消耗している様子だった。ふだんの父から見れば考えられぬことである。
父——黒河内雄策は、生殖生理学を専門とする医学者として、K大医学部で教鞭をとるかたわら、産婦人科臨床医としても、日本のトップクラスの地位を占め続けて

来た。
年齢は六十に近くなろうとしていたが、かつて私は疲れて帰って来た父の顔を見たことはない。
だがこの半年余りで、父を取りかこむ環境は変わった。きわめて大規模かつラジカルな、ある国家的特別プロジェクトに参画したことによって、文字どおり日々命をすりへらすような激務を強いられて来たのだった。
そのプロジェクトは準備段階が終盤にかかり、まもなく稼動しようとしている。今日も、最終的な詰めの作業に、遅くまでつかまっていたのだろう。
「ごくろうさま」
私は微笑とともに声を投げかけた。
「今日もたいへんだったようね」
「ああ……」
父は微笑を返した。みごとな白髪に、顎の張った意志的な顔。コンタクトレンズをはめた目が、憔悴しているにもかかわらず強い光をたたえていた。——肉体こそ疲労しているが、父の精神は充実しているのだ。父は自分の意志で、その特別プロジェクトのリーダー役を引き受けた。父は、三十年にわたる医学者としてのキャリアを、それに賭けているのである。
「何か召し上がる？」
「いや。——熱い紅茶を入れてくれ」
私は頷き、キッチンに向かった。ジャクソンのティーパックを使って、すばやく二つのカップを用意した。
向かい合って座り、私たちは紅茶をゆっくりと啜り始めた。
「大変だったが、山は越えた……」
パイプに火を点けながら父はいった。
「マスコミの論調もだいぶ理性的になった。大っぴらに賛成はできんが、将来に対する一種の保険として、認めざるをえないというところだな。
保存作業も、ほぼめどがついた。リストアップした連中のそれを、せっせと銀行に入れている。あと残る問題は、法的な手当てだな。だがこいつは、じっくり時間をかけてやるほかはあるまい。
何しろ法務家の連中は石頭だ。超保守的な頭の持ち主といってもいいほどだからね」
「しかたがないわ」
私はぽつりといった。
「いつだって法律は……つまり社会慣行というものは、モラルや価値の転換のあとから従いて来たのよ、それも

しぶしぶとね。
いつの世だってふるい価値を尊ぶ人間は多い。法律はその代弁者にすぎないのよ。
でも、このプロジェクトはぜひ成功させなければいけないわ。人間の生きかたを本当に変えるきっかけになるかもしれないのだから……」
私は真実そう信じていた。胸の中でこう付け加えた。
——とくに女にとっては、生きかたのルネッサンスになるはずよ。
父が取り組んでいるプロジェクトは、人間の生殖のシステムを根本的に変えようというものである。
結婚＝生殖というプロセスから人類を解放し、やがては生殖そのものを、女性の肉体を借りずにやってのけようというもくろみさえ持っていた。
いわゆる人工授精——子どもにめぐまれぬ夫婦間において、いったん外へ取り出された男性の精子を、女性の子宮に注入する技術は、決して目新しいものではなくなっている。
これには配偶者間人工授精（A・I・H）と、第三者の提供者の精子を用いる非配偶者人工授精（A・I・D）とがあるが、前者はすでに十八世紀後半から不妊治療に用いられて来た。だが成功率は、より健全な精子を使う後者の方が高く、この方面の先進国であるアメリカでは、A・I・Dによる出生者が、一九八九年の今日まで、百万人以上にのぼると推定されている。法的な認知その他の諸問題も次々に解決され、アメリカでは、社会慣行として定着しつつあった。
だが父たちが推進しつつあるプロジェクトは、人工授精の理念をさらに大胆に突き進めたものである。優生学的、遺伝学的に健康で優秀な男性の精子を、グリセリン処理により冷凍して保存し、——いわゆる精子銀行という考え方だ——妊娠をのぞむ女性に、彼女が欲するままの遺伝的特質を持った精子を選択させ、与えようというのが、その計画の骨子だった。
現時点では技術的な壁が立ちはだかっている。母胎外授精技術が開発され、さらに人工胎盤が実用化された暁には、完全な人工受胎児——すなわち試験管ベビーが生まれて来ることにもなろう。現在のところ、卵子の長期保存はむずかしく、授精のために試験管内で精子を能動化させることも不可能なのだった。
当然、このような計画が推進される背後には、社会的な要求がある。二十世紀終盤の人類社会をおおう暗雲が、その圧迫の源だった。

第三・第四世界における人口爆発は依然として続いており、気象学者が警告を発していた地球の寒冷化現象による世界的凶作は定常化し、ただでさえ乱れていた食糧供給のバランスは悪化し、エネルギー問題もからんで、先進諸国と第三・第四世界との緊張は高まっていた。

加えて、核拡散現象によって後進国家の核兵器の所有は公然の秘密となり、南北の対立が核戦争を引きおこす可能性も高まっていた。

精子銀行——すなわち優生学的に保証された精子が任意に供給されるシステム——は、これらの危機的状況に対し、多くのメリットをもたらすだろう。

第一に、核戦争が勃発した場合には、——それが限定核戦争であっても——男性の生殖機能に致命的な放射能障害が起こり、遺伝子が汚染されるおそれがあるが、その状況に対する保険となりうる。

第二に、人口爆発を制御する有効なブレーキシステムとなりうる。第三に、いまだに根絶し切れていない悪性の遺伝病・遺伝性ガンを駆逐することにもなる。人類は、人工的に淘汰されたすぐれた遺伝子プールを持つことになるのだ。

むろんこれは、まだ実験プロジェクトにすぎない。

だが、日本のみならず、アメリカ、ヨーロッパ諸国でも同様にプロジェクトが進められていた。

——父のことばから察すると、精液保存作業も、順調に進んでいるのだろう。芸術家、学者、スポーツマン……全国から選び抜かれた優秀な生物個体としてのエリート男性の精子だった。むろん人選は難航をきわめ、さらに選ばれた人々に精液提供を納得させることも困難だったはずだ。父を始めとする官民合同のプロジェクトチームのメンバーの、血のにじむような努力によって、ようやくそこまでこぎつけたのだろう。

「だが今後に大きな問題が残っている」

父は呟くようにいった。

「国民のコンセンサスをどう取り付けるかだ。たしかに近ごろ、セックスのモラルは加速度的に変わっている——私など、とうてい従いて行けんほどにな。

しかし、精子銀行に行って精子をピックアップすることは、女性にとって大変な勇気が要るだろう。愛情というものを仲介とする生殖のシステム・意識をまず転換しなければならん。銀行から預金を引き出すようなわけにはいかんのだ。

われわれには勇気ある女性が必要だ、みずから進んで

この性改革の先鞭をつけてくれる女性がね。――それも早ければ早いほどいい。いざとなってからでは遅すぎる。人間の成長サイクルは長い。世代間に大きな穴が開くようになっては、はなはだまずいのだ」

「心配することはないわ。人間は変わるのよ、パパ」

私は無意識のうちに紀彦のことばを真似ていたようだ。

「勇気のある女性はきっと現われるわ。自分と、そして人類を改革する勇気を持った女がね」

3

私たちはくつろいでスクリーンを見守っていた。シェードを下ろした教室の中である。スクリーンを半円形にかこむ席を、二十人ほどの男女が占めていた。いずれも研究仲間だった。ここS医科大学大学院で、私たちは梅原教授のもとに人工胎盤研究グループを構成していた。父と同じ道――生殖生理学研究――を、結局は私も選んだのだった。

スクリーンには、二昔前ならスキャンダラスな話題を招きかねなかったしろものが映されていた。もちろん純学術的なフィルムである。かの有名なワシントン大学の性医学者マスターズが撮影した、性行為時の女性の肉体の反応をつぶさに記録したフィルムの最新版だった。

梅原教授が、なぜか今日、私たちにそれを見るよう命じたのだった。性行為を原点からふたたび観察させようという考えがあったのかもしれない。

スクリーンには、人工ペニスを挿入された女性の膣の内部がクローズアップされていた。膣壁は、早くもびっしりと汗を掻き始めていた。性交における肉体変化の第一段階、興奮期である。かつてはバルトリン腺液の分泌と考えられたが、そうではなく、発汗作用に近いものだ。あざやかなカラーにとらえられたその光景は、美しかった。

私は、隣りに座っている矢筈紀彦の手に指をそっと這わせた。だが彼は手を握り返そうとしなかった。何かが依然として彼をかたくなにさせているらしい。――私は手を離し、スクリーンに見入った。

映像とナレーションとが、女性性器の劇的な変化を、克明にとらえていた。発汗反応とともに、膣は膨張し、子宮は膣の入口に向かって上下運動をする。クリトリスもわずかに増大し、小陰唇はピンク色に染まり、平常時の二、三倍に腫脹する。乳首もまた勃起する。

次の高原期に入るとさらに反応は高まる。女性は外界からの刺激にほとんど注意を払わなくなる。腟の酸性度が変化して精子の生存に都合のよい状態となり、腟の下部が充血して来る。――あざやかな皮膚反応がさらに現われる。胸部から腕、顔、背中へと続く麻疹様の発疹だ。ピンク色の斑点で皮膚が染まるのだ。さらに小陰唇はピンクから深紅色に変わって行く。約一分後にオルガズムが来るというしるしなのだ。

ついに、オルガズム期がやって来る。これは、短時間（三秒から八秒）の、爆発的な感覚的体験だ。オルガズムを迎えると、腟は約十分の一秒の周期で、四回から十回ほどリズミカルに収縮するのだ。脈搏数は一分間に百五十に近づき、血圧が最低血圧は百六十に、最高血圧は二百五十以上に上昇する。呼吸はふかく、早く、次第にとぎれがちになる。

スクリーンの女性の顔は、美しいとはいえなくなっていた。走り続けてあえいでいる長距離ランナーのように歪み、瞳孔は拡大し、ひっきりなしによだれを垂れ流している。血液中の酸素が減り、腺の分泌が増すためだ。

末梢血液の循環が増すために、顔は真っ赤に染まり、鼻や耳たぶ、唇がふくれあがっている。感覚能力が減少するために、彼女は今何も聞こえなく、感じなくなっているはずだ。さらに体ぜんたいの筋肉が、スラストと呼ばれる不随意的なリズミカルな収縮と弛緩を起こしているだろう。彼女の脳波図が映し出された。それはテンカンに似た脳波パターンを示していた。

――ようやくオルガズムは去った。彼女は腋の下に汗をかき、性器と乳房は、十秒足らずでもとの状態に戻って行った。……

一時間後、私たちはキャンパスの芝生の上に座っていた。S医科大学大学院は、神奈川県厚木郊外の丘陵中にある。都心からは、フリーウエー二四六号線を車で飛ばして四十分の距離だ。

今日の授業はすべて終わり、私たちは自由になっていた。どことなく煙たそうなそぶりの紀彦を引きずるようにして、キャンパスの中庭に腰をすえたのだった。

冬にしては暖かい日が続いていたが、さすがに陽が落ちて来ると冷え込む。芝生の上で肩を寄せ合うにふさわしい雰囲気ではない。だが私は、妙に依怙地になっていたようである。――私から去って行こうとする紀彦の気配を、本能的に感じ取っていたのかもしれない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com